

〈書評〉

川島慶子著

『マリー・キュリーの挑戦——科学・ジェンダー・戦争』

(トランスビュー 2010年 212頁 ISBN 978-4-901510-89-9 1,800円+税)

森 義仁



本著作は、科学と言う人間の活動を舞台にした、マリー・キュリーとその娘たちイレヌとエーヴの二世帯が生きた時代の、キュリー家の母と娘とそこに繋がる女性たちの生き様を通じ、容易には見えてこないジェンダー・バイアスを、科学史研究者川島慶子氏が可視化を試みたものであり、100年近くも前の出来事を題材にしているにも関わらず、現代の男女共同参画問題にも繋がることが見受けられる。現代の男女共同参画問題の中でも、女性の研究者・技術者の育成は、わが国の第二次男女共同参画基本計画において課題としてあげられ、一体何が問題なのか、何が必要なかが、近年、研究者や技術者の集会で盛んに議論されるようになった。直近の集會として、2010年12月、米国で開催された太平洋に面する国が参加した化学系集會においても1日半の時間がこの問題に割り当てられ、各国の取り組みが紹介され、議論が行われた。子育てを初めとする非常に個人的なことから含むキャリアデザインやリーダーシップをいかに育むかなどの問題に、メンターの存在とネットワーク形成の重要性が強調された。このような現代の問題に直面するときでさえも、マリー・キュリーと彼女に繋がる女性たちの生き様を、ジェンダー・バイアスの視点から、科学に魅せられた川島慶子氏が解剖した本著作の内容は、今尚生きているものと言えよう。

本著作の構成は比較的短い章立てになっている。「あとがき」を一章分とすると、全20章、一章の平均が10頁となる。実際に出版されたものに至るまでの編集作業では、削除されたり、追加されたことであろうが、著者がより重要視するものにはより多くの頁が割り当てられた考えると、イレヌの研究上の競争相手であったリーゼ・マイトナーに関わる「リーゼ・マイトナーの奪われた栄光(第13章)」とマリー・キュリーを巡る「三つの恋の物語(第2章)」が他の章に比べてより多くの頁が割り当てられている。本著作名「マリー・キュリーの挑戦」を文字通りに受け取れば、科学研究におけるマリー・キュリーの奮闘に最も多くの頁が割り当てられてよいはずである。ところが実際はそうではないところに本著作の構成の特徴が現れており、マリー・キュリーとその娘たちを含めた、その時代の女性たちの生き様が下地になっている。従って著作名に含まれる「マリー・キュリー」とは、そのような女性たちの代名詞と受け取ることができる。そして、「あとがき」に10頁も割り当てられており、著者川島氏がどのような経緯と思いで本著作に取り組んだかが述べられている。「マリー・キュリー」を、単純に、海を越え、時間を遡ったところでの出来事とせず、川島氏は、幼少の頃から科学に興味を持ち、お堅いキュリー夫人より、破天荒なアインシュタインに心を惹かれた自身を思い、しかし、物質的に豊かになり、女性の政治への参加や、高等教育課程への進出が整備されつつある中で、氏が述べるように「実際には社会のジェンダー・バイアスにより、女の子と科学は切り離されていた自身の時代を描くことでもありました」と言う、この「あとがき」を読み、初めて、個人的な問題にこそ社会の仕組みに深く根を張るジェンダー・バイアスの片鱗が現れていることを、多くの女性たちの生き様と、その置かれた環境に見出し、過去の終わったことではなく、現在でもなお再考する必要があることを示す本著作の構成を知

るのである。

さて、ここから、本著作の構成の特徴を、眺めて行く事にしたい。第1章「少女の怒り」から第8章「科学アカデミーに拒まれた母と娘」までの前半は、マリー・キュリーを中心に、各章が相互に比較的繋がりのある展開となっている。母国の独立は悲願で、支配する隣国に対する怒りや競争心を女性が持つことが受け入れられる雰囲気の中で、女性が高い学問を修めることが可能であった少女時代（第1章「少女の怒り」）。家柄や財産の違いを理由に破局する恋、ともに科学研究をすることを誘う、後に夫となるピエールとの出会い、外国人で年上女性であるが故に社会的圧迫に晒される原因となるランジュバンとの不倫（第2章「3つの恋の物語」）。「前の年に人類に最大の貢献をした人たちが」受賞資格であるノーベル賞を、ガン治療に役立つと信じられていた研究を行ったキュリー夫妻が受賞することに全く問題はないが、そこにはノーベル賞の名声を高めること、科学者の縄張り争い、国と国との競争が微妙に関係し、科学と社会の接点があること（第3章「ノーベル賞を有名にしたもの」）。フランスが原子力政策で世界の指導的立場であることを誇示するために、キュリー夫妻の遺体を、祖国の偉人を葬る非宗教墓所＝パンテオンに埋葬することを1995年に決定したこと（第4章「墓はなぜ移されたか」）。キュリー夫妻がベクレルとともに受賞するノーベル物理学賞に関わる研究は、そもそもマリーの研究課題であり、その実験的研究においては夫婦ともに先導的な役割を果たしたにも関わらず、「頭脳はピエール、肉体労働はマリー」と言う「霧」に覆われていたこと（第5章「誤解された夫婦の役割」）。第1次大戦において、X線医療診断装置をトラックで運び、負傷兵の診察に貢献したことは、平時にあっては決して受け入れ難い女性の活躍が、有事には可能となること、ただしそこにはあくまで戦う男性の協力者としてならという条件付きである（第6章「二つの祖国のために」）。学業修了後はポーランドに帰国するマリーを、自身の共同研究者とすることを欲したピエールとの出会い（第7章「ピエール・キュリーの個性」）。フランス科学アカデミーがノーベル賞を受賞したマリーのみならず、やはりノーベル賞受賞者であるマリーの娘イレヌをも会員とすることを頑なまでに拒否し、母娘はそれに立ち向かったこと（第8章「科学アカデミーに拒まれた母と娘」）。以上、第1章から第8章までの間ではマリー自身に関わり、その個人的な出来事が、社会に深く根を下ろした「雰囲気」の中で、ある時は、その雰囲気に受け入れられ、またある時は受け入れを拒否されながら、進行する様を描写し、そこに、あの偉大なマリー・キュリーと言えども社会を構成する一人の女性であったことを浮き彫りにしている。

前半の8章分は、歴史上の偉人マリー・キュリーに触れたい時に手にする伝記にも現れる史実を含み、それらを本著者川島氏が独自の考察を加え、ジェンダー・バイアスを可視化している。そして、後半へ進むと、これまで一本の糸で縦に繋がっているように見えた前半とは異なり、横への広がりを持つ構成へと転換する。それは第9章「変貌する聖女」から始まる。世界中に存在するキュリー夫人伝記の第一文献、マリーの次女エーヴの著した母の伝記「キュリー夫人伝」が与える、聖女のような科学者にして妻であり母であるイメージを崩す、ランジュバンとの不倫やアカデミーの選挙のことを顕わにする伝記の登場である（1970年代以降）。これは「個人的なことは政治的である」とのスローガンを持つ第二波フェミニズム運動と相まって展開することになる。第10章「マルグリッド・ボレルとハーサ・エアトンとの友情」では、マリーと娘たちが、ランジュバン事件により不平等な圧力を受けているときに支えとなる女性たちの存在が示され、第11章「放射能への歪んだ愛」では、ガン治療に役立つものとして登場した放射性物質は、使い方を誤れば薬も毒となることを、マリーは最後まで認めることがなかったことが紹介され、第12章からはマリーとその娘たちと、間接的に関係のあった女性たち、天才科学者ア

インシュタインの妻ミレヴァ（第12章「アインシュタインの妻」）、マリーの長女イレヌとは研究上の競争相手であったリーゼ・マイトナー（第13章「リーゼ・マイトナーの奪われた栄光」）、マリーに師事をする日本人留学生山田延夫の妻浪江（第14章「放射線研究に斃れた日本人留学生」）の個人的な出来事が、社会との接点を探しつつ紹介され、キュリー家を取り囲む状況の中にジェンダー・バイアスを見ることができる。

その後は、話題はキュリー家の中への移る。マリーの二人の娘、イレヌとエーヴは偉大な母を通じて繋がっているものの、粗野な生き方のイレヌとエレガントな生き方のエーヴと言う、外面的なイメージに縛られ続けた二人（第15章「偉大な母の娘たち」）、イレヌの夫となり、イレヌとともにノーベル賞を受賞するフレデリック（第16章「キュリー帝国の美貌のプリンス」）、そのフレデリックを師と仰ぎ研究にその身を捧げた湯浅年子（第17章「湯浅年子の不屈の生涯」）。第8章の後、話題はキュリー家の外へ、そして再びキュリー家の中に話題を戻し、締めくくりの最終章が来ることを期待させつつ、第18章には、働く女性の意思表示としてのチャンネルを引き合いに、その時代に女性の服装の流行に逆らい、簡素な服装を選ぶマリーを描き、最終章一步手間の小休止を作っている。

そして、最終章となる第19章「完璧な妻、母、科学者という罫」では、アメリカを訪れたマリーを讃えた、時の大統領ハーディングの言葉「気高い女性であり、また献身的な妻であり、やさしい母でもあり、その重く困難な仕事に加えて、女性としてのつとめをすべてはたした人」を契機に、なぜ女性はすべてをはたさないといけないのだろうと疑問を呈しつつ、最後に、「何を学ぶべきか」に対して、著者川島氏は読者に、示唆を与えつつも、何かを強制することはないが、本著作を読み終えて感じることは、有限の選択肢の中から一つ選択すると、その時点で、残りの選択肢は消え、そして再び選択肢が現れる。この繰り返しだが、一度きりの時間を、そして人生を作っているということであり、その選択において、勇気を必要とするものほど、充実した時間を感じることができるのである。

（もり・よしひと／お茶の水女子大学理学部准教授）